

2024（令和6）年度
総合型選抜(10月Ⅱ期)

文 化 史 学 科

小 論 文

10時00分～11時20分

受 験 に つ い て の 注 意

1. 試験開始の前に、以下の注意をよく読んでおくこと。
2. 試験開始の合図があるまで、この冊子を開かないこと。
3. この冊子の問題本文は**4**ページである。試験開始後、問題を確認し、落丁・乱丁の箇所があるときは手をあげて交換を求めること。
4. 解答用紙はすべて**HBの黒鉛筆またはシャープペンシル**で記入すること。
5. 試験開始の前に、解答用紙の定められた位置に氏名と受験番号を記入すること。
6. 解答は解答用紙の指定された場所に記入すること。余白、裏面には何も書いてはならない。別に下書き用の用紙を配布するが、使用については自由である。
7. 筆記用具、受験票以外のものは、かばん等に入れ、机の下に置くこと。
8. 試験時間中に無断で退場することはできない。
9. 終了の合図があったら、ただちに筆記用具を置き、解答用紙は表を上にして置くこと。この冊子（試験問題）および下書き用紙は持ち帰ってよい。

次の課題文を読んで、あとの設問に答えなさい。〔100点〕

【課題文】

(a) 人は連帯することによって生きているという根拠的事実が、誰の目にも明らかに瞬間がある。それは大災害の瞬間である。そのことをソルニットの『災害ユートピア』から学ぶことができる。『災害ユートピア』は二〇一〇年に邦訳が上梓されていたが、3・11の大震災以降に本格的に注目されるようになった本である。この本において、ソルニットは、大災害に関して抱かれてきた支配的な通念を覆そうとする。それは、大災害に遭遇した者たちはパニックに陥り、社会性を後退させ利己的になり、結果として大混乱が発生する、という通念である。暴動や略奪による混乱こそが大災害時の人々の行動についての正しいイメージだ、というわけである。だが現実とは異なっている。3・11のあと、この国の被災者たちの助け合いの姿に対して賞賛の声が向けられたが、そのような光景は少数の例外ではなく、むしろ大災害における常態であるかもしれないのである。

大災害は既存の制度や秩序がうまく働くことを困難にする。その点で、大災害はたしかに一時的に混乱を引き起こす。ときに暴動や略奪も発生する。だが、暴動や略奪という事態によって大災害時の人々の姿を代表させることはできない。大災害に直面した人々のあいだには、そうした騒乱とは大きく異なる特別な光景が広がるからである。相互扶助と利他主義の光景がそれである。「地震、爆撃、大嵐などの直後には緊迫した状況の中で誰もが利他的になり、自身や身内のみならず隣人や見も知らぬ人々に対してさえ、まず思いやりを示す」。

災害時にこのような特別な光景が見出されるのは、どうしてだろうか。大災害においては、誰もが身ひとつの状態で路頭に放り出される。この事態が意味するのは、これまで人々の生を支えていた様々な制度や仕掛けが突然に崩壊してしまうということである。このような状況に置かれたとき、人々は、他者に頼るほかに自身の生を維持する術はないという

冷徹な事実直面する。さらに、この事態は、日常生活に張り巡らされ、人々を分断していた階層や地位などの壁が一時的にせよ崩れ落ちてしまうことを意味する。大災害においては、期せずして、人々が垣根を超えて助け合うことを可能にする連帯空間が切り開かれるのである。

日常生活において、私たちはいつも思いやりや隣人愛から行動しているわけではない。私たちは、ときに競争相手として振る舞わざるをえなかったり、ときに相互に無関心であったりする。日常生活が奇跡的に滑らかに進行しているかぎり、ばらばらであったり孤立していたり、場合によっては敵対している状況においても、人は生を営むことができる。たとえば、^(b)市場が相互扶助的な人間関係を代理してくれるからである。だが、この日常の秩序が大災害によって解体されてしまう。この秩序が崩壊するとき、人間は一人で生きてゆくことはできないという、生の唯物論的事実が露呈する。大災害は日常の秩序からの切断を作り出すことによって、一時的であるにせよ共同性の空間を生み出す。この空間において、人は相互扶助と利他主義を生きるのである。

そのようにして災害時に出現する相互扶助の空間を、ソルニットは「災害ユートピア」という逆説的な響きを帯びた名で呼ぶ。このユートピア空間は、災害によって日常の秩序が一時停止されることによって立ち上がるものであるため、その寿命はひどく短い。

それは、まさにその本質からいって、維持不可能であり、一過性にすぎない。だが、稲妻の閃光のように平凡な日常生活を輝かせ、時には雷のように古い体制をこっぱみじん打ち砕く。それは多くの人にとって、つらい時期にほんの束の間実現したユートピアだ。

そのつど出現する災害ユートピアの寿命はひどく短い、その可能性は底知れない深さをもっている。大災害がそれ以前に成立していた秩序や制度、それらを支えるイデオロギーを崩壊させるとき、そこに発生するのは単なる混沌ではない。もちろん行政機関はその機能をほぼ停止させてしまうから、アナキーが存在している。だが、それはカオスではない。それは、「人々が自由に選んだ協力のもとに結束する、クロボトキンの提唱する無政府状態」である。自発的な相互扶助が活き活きと維持されるがゆえに、政治的権威が無用になるアナキズム空間——それが災害ユートピアである。大災害は既存の秩序を解体し、アナキズム的な連帯の空間を垣間見させる。それゆえ、大災害は革命に似ている。そこに別の社会の可能性が到来するからである。

大災害においてユートピアの連帯空間が垣間見えるのは、なぜだろうか。ソルニットの答えは単純である。大災害のような生の可能性が脅かされる事態に直面したとき、どのように振る舞うべきなのかということを、人間はあらかじめ知っているのである。「パラダイスの可能性は、ちょうど初期設定のように、すでにわたしたちの中にあるのだ」。相互扶助、利他主義、あるいは共同的な構えといったものが、自然（本性）として人間存在のうちに根付いているというわけである。それゆえに、災害の発生によって日常性の軛が解除くびきされるとき、人々は初期設定の状態に立ち戻り、相互扶助と利他主義の空間を自然発生的に切り開く。災害は、たしかに困難で苦しい経験である。しかし、災害は、人間のそうした「自然」を解放する力を帯びてみいる。

（馬淵浩二『連帯論 分かち合いの論理と倫理』筑摩書房、二〇二一年）

* 著作中にある小見出しは、課題文では省略した。

【設問】

問1 傍線(a)の「人は連帯することによって生きているという根源的事実」という文言によって、筆者はどのような事柄を念頭に置いているか。三〇〇字以内で要約しなさい。

問2 傍線(b)の「市場が相互扶助的な人間関係を代理してくれる」という文言は、どのような事態を指しているか。具体例を挙げて二〇〇字以内で説明しなさい。

問3 「人は連帯することによって生きているという根源的事実」に関するソルニツトの見解は適切だろうか。適切かどうかについてのあなた自身の考えを五〇〇字以内で記しなさい。